スーパーワールドウォーズ～作り作られ壊される生～

カーナビレッスン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて起こった数々の大戦争を経験してなお、争いを繰り返している世界

ＰＤ世界

銀河を巻き込んだ大戦争によって、一応の平和を手に入れたがその一方で滅亡の影が忍びよる世界

α世界

一人の偉大なる指導者によって世界から戦争は消えたが侵略行為をする組織が責める世界

９９年世界

この三つの世界が重なり合った時…大いなる歴史が始まる。

宇宙全土支配を目論み活動し、ほとんどの星を手に入れたザール星間帝国。
タクト・マイヤーズが率いているエンジェル隊、オルガ・イツカらが率いる鉄華団などが協力し、それぞれの目的のためにザール星間帝国へと戦いを挑む。
魔女、根源的破滅招来隊などの脅威に対抗するために魔法少女、ウルトラマンなどが揃い、ビートライダーズと呼ばれる若者たちがダンスを競い合うものたちが真理を知る。
マシン帝国バラノイア、五次元帝国、ベーダー一族、アクト団などの組織が地球を狙っているがそれに対抗する組織や機械生命体トランスフォーマーという存在が来て戦闘が激化する。
それぞれの世界が繋がった時に戦争が変わった。
戦争は新たなる歴史を生むか悲劇を生むのか…過去と未来を超える者たちの戦いは新たなる道を作る。
注意
この作品第三次スーパーロボット大戦α外伝の続きです。
詳しいことは後日報告します。

これは完結しました、というか打ち切りなので詳細は別の小説に書いていく予定です。

目次

～作り作られ壊される生～ ―― 1
僕とうちのこれから ―― 7
これからのあり方 ―― 18
暗殺者としての才能 ―― 30
臆病なほど司令官 ―― 37
激突！新皇対トランスフォーマー45 ―― 57
作戦名ＣＲ　Ｅ ―― 68
もう一人の巨人 ―― 80
モナカス攻略作戦 ―― 86
バッドエンドだとしても… ――

～作り作られ壊される生～

パトリック『とりあえずわかりますそれぞれの世界を分けるとこのように分かれている。ちなみに、俺はα世界出身だ。』

α世界

仮面ライダー鎧武

仮面ライダー剣

爆竜戦隊アバレンジャー

無敵超人ザンボット３

ウルトラマンＡ

ウルトラマンネオス

ウルトラマンティガ

ウルトラマンガイア

ウルトラマンコスモス　ＴＨＥＦＩＲＳＴＣＯＮＴＡＣＴ

ウルトラマンマックス

魔法少女まどか★マギカ

機動武闘外伝ガンダムファイト７ｔｈ
機動戦士ガンダム第０８ｍｓ小隊
機動戦士ガンダムｏｏ
聖戦士ダンバイン
動物戦隊ジュウオウジャー
ＩＳ－インフィニットストラトスー
銀河疾風サスライガー
機動戦艦ナデシコ
ダンガンロンパゼロ・１・２・３
９９年世界
おジャ魔女どれみ
超力戦隊オーレンジャー
電子戦隊デンジマン
絶対無敵ライジンオー
恐竜キング　Ｄキッズアドベンチャー
ドラえもん大長編シリーズ
リーンの翼

人造人間キカイダー　ＴＨＥＡＮＩＭＥＴＩＯＮ
無敵ロボトライダーＧ７
タイムボカンシリーズヤッターマン
戦え！超ロボット生命体トランスフォーマー
トランスフォーマー　カーロボット
ＰＤ世界
ギャラクシーエンジェル
メガゾーン２３
機動戦士ガンダムＦ９０
機動戦士ガンダムＡＧＥ
機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ
セイバーマリオネットＪ
ウルトラマンＧ
星銃士ビスマルク
ノブナガ・ザ・フール
忍者戦士飛影
ビビットレッド・オペレーション

ガン×ソード
ＴＨＥビッグオー
快傑ズバット
蒼穹のファフナー
蒼穹のファスナーＲＩＧＨＴＯＦＬＥＦＴ
別世界
サクラ大戦
ニューダンガンロンパＶ３
仮面ライダービルド
宇宙戦隊キュウレンジャー
かいけつゾロリ
??????
パトリック『これで一応参戦作品は全部だ。まあ、劇場版やら漫画版の設定が入る作品もあるから注意してほしい。ちなみに最後の??????は本当に重要だから発表できない。許してくれ。』
パトリック『色々と作者も時間がないからすまないな。ま、俺もこれから出てくるはずだからよろしく！』

パトリック『ちなみにここから下は来週の話への前振りだ！それでは、どうぞ！』
ーエジプト上空ー
ーエルシオールー
ー司令室ー
俺は東の星のジャックとの連絡をしている。
今まで連絡を取り合っていたのは互いの状況を確認するためであった。
タクトとジャックは交渉に成功して、パドックさんのほうは逆に揉めたらしい。
まあ、パドックさんの世界で光武が二機見つかったことだけでも良かった。
レスター『それじゃあな、ジャック。他のメンバーとの交信が出来次第伝える。こっちもそろそろ雲行きが怪しくなってきた。そちらはオルガとお前に任せる。』
ジャック『了解した。にしてもこっちはそのスパイから色々と聞くが…そっちはどういう状況だ。』
レスター『謎の戦闘機と電撃が街を襲っているようだ。美空町の横の町らしいが…ビルも何軒か倒れている…被害はまだ小さい。紫色の光武が戦闘機を6機機落としているがまだ7機くらい残っている。』
ジャック『ともかくそっちは任せたぞ、恐竜カードとトランスフォーマーは最重要だからな。』

ジャックとの通信を切った俺は振り向いてマジョリカと二人きりになった。
マジョリカ『レスター…お主だけには話しておいたほうが良いことがある。あの五次元帝国とわしとベルゼブと魔女界…そして阿頼耶識についてもな。』

僕とうちのこれから

ー99年世界ー

ー森ー

最原『夢野さん！こっちに姿を隠すんだ！あの空の敵はすみれさんに気を取られているからそのうちに！』

夢野『わかっておるわい！』

僕の名前は最原終一

ダンガンロンパというコロシアイ番組をしていた世界から出てこれた時にスーパー戦隊という組織が存在する世界へと辿り着いた。

どうやってここに来たのかはわからない。

僕はこの世界がダンガンロンパが放送されている世界かと思っていたために混乱してしていた。

ダンガンロンパが放送されていた世界に帰ってきた場合…良くて監禁されるか悪くて殺される可能性が大きかったため、悪くないと思う。

しかし、ダンガンロンパは人々の楽しみのためにあるかとも思っていたけど他にも何か活動理由があったのかもしれない。
そんなことは今はよくわからない。
今はとにかく春川さんや三浦さんたちと合流しないといけなかった。
夢野『最原…まさか…ハルマキは……』
最原『そんなことないよ！春川さんが死ぬわけないだろ…』
自身よく春川さんの死のことを否定した。
そんなわけない、死ぬわけがない。
彼女は生き残ったメンバーの一人なんだ。
設定とはいえ暗殺者の彼女が死ぬわけがないと思いたかった。
だが、相手は機械帝国バラノイア。
謎まみれのロボット軍団と闘わないといけない。
僕たちはエグイサルという小型ロボットを見てきたがそれすら勝てなかったのに…
どちらにしてもここにいるのはピンチだったのでまずはバラノイアの兵士から逃げるために森の中に深く入っていった。
夢野『こ、ここまで来ればなんとかなるじゃろう…ふー、まさか車から投げ出されるとはのう…すまんかったな、最原。』

僕は車を攻撃された時に夢野さんをかばってドアを開けて車から身を投げた。
その時に少し傷を負っていたけど歩けなくなるほどの状態になっていなかったのが救いだった。
最原『大丈夫だよ、それにもう僕たちは三人だけじゃない。星野吾郎って人が来てくれるみたいだし…』
唯一いるオーレンジャーのオーレッドがここに助けに来てくれるそうだ。
スーパー戦隊…の新戦隊か…
基本的に五人組の彼等のリーダーの赤色がいるのは助かるな…
でも、スーパー戦隊の戦いによる被害は大分甚大なんだよな…
あるスーパー戦隊を見て春川さんが腰を抜かしていたけど…ともかく待つしかないか。
夢野『そうじゃな…だが…もし間に合わなかったらどうするんじゃ…』
最原『夢野さん！そんなことないよ！』
夢野『最原……うちはのう…怖いんじゃよ…たしかにここに来てこれたのは本当に良かったと思っておる…じゃが……ここにはルールがない。あのバラノイアはうちらのことをゴミのように扱うてきておる…いつ死んでもおかしくないじゃろ…』
最原『そ、そりゃあ確かにそうかもしれないけど！ここだと人を信じていいんだよ！

そばにいる人がいきなり自分を殺そうとすることはないから大丈夫だよ！それにみんなで協力していいんだ！』

夢野『それはわかっておる！じゃがのう…うちは…いや…最原よ…お主は生きたいと思っているが心のどこがでは死んでも良いと思っておらぬか？』

最原『え？ぼ、僕がそんなこと思っているわけ…』

夢野『いや、確実に思っておるじゃろ。自殺することはないがこの状況で死ぬのは仕方ないと心の底で思っておる!!』

夢野さんがすごい声で叫んだ。

いつもの夢野さんとは違う…

そんなこと思ってない！

…と言えなかった。

なんでたろう…なんで夢野さんはこんなことを…

夢野『なんでわかったかという顔じゃな。それはな、お主は赤松に会いたいんじゃろ…あやつのもとに行きたいんじゃろ？』

赤松さんに会いたい…

だから死にたい…

……

……

…その通りだな。

最原『なんでわかったの…』

夢野『お主は最後の学級裁判で希望と絶望も否定してオシオキによる死亡を望んでいたじゃろう。…うちもハルマキもそうじゃったからのう…』

最原『百田君にアンジーさんに茶柱さんに赤松さん…みんな本当に会いたい人は死んでいるから…だからこそ死んでもいいと思った。そうでしょ…でも生き残った…これは喜ぶべきなのかどうか今でも悩んでいるんだ!!

希望も絶望も選ばないからこその僕たちの死は僕たちが最後に望んだ死になったはずなんだ!だけどそれでダンガンロンパはどうなっているのかわからない!

こんな世界に来て訳の分からないことばかりだ!

死にたいとも…死にたくないとも思ったよ…でも、本当に大事な人が生きていなかったら!人は生きていけな…』

僕が激昂して最後の言葉を言いかけた時に自分の口が柔らかい何かで塞がれたのを感じた。

いや…この何かは……

唇…えっ…

夢野さん……

ふと我に返って前をよく見るとそこには涙で顔中をめちゃくちゃにしている夢野さんの顔があった。

夢野さんは僕の唇に対して必死で自分の唇を当ててくる。

しかもまだまだ続いてる…

そして３０秒がたったころに唇を離した。

夢野『最原よ……やはりお主の心には赤松がおるのじゃろう……赤松を思いを継ぎ…赤松のことを思い…生きてきたんじゃろう…お主にとって一番大事な人は赤松なんじゃろう…でも、うちは違うぞ!!うちの大事な人は…お主じゃ!!お主が…ぐすっ…お主が一番大好きなんじゃ!!!お主を一番愛しておる！お主のことを考えると夜も眠れなかった!!なのに…お主はずっと赤松のことばかり…うちは何度も何度も何度も何度も何度も泣いた！だがうちはそれでも良いと思っておったが…もう違う…

お主が赤松を好きだったのはダンガンロンパの設定かもしれんし…うちがお主のことを好きなのも設定かもしれんが…うちはお主を最原終一を一番愛しておる!!

死にたくないのはお主がおるから…お主とともに生きたいからじゃ!!…最原はうちを一番と思っていなくてもいいぞ…うちは…それでもいいと思って…』

僕は先程夢野さんがやったことと同じように自分の顔を動かして夢野さんの口を塞いだ。

2回目の接吻は互いに慣れたように数秒重ねたあとに離した。

最原『夢野さん…うれしいよ…僕は諦めていたのかもしれない。どちらかというと死にたがっていたのかもしれない。だけどわかったんだ。本当に大事なことはこれからなんだ…この世界には僕たちを知る者もいないし操る者もいない。これから僕たちは僕たちになるんだ!そのためにも夢野秘密子さん…僕は君のことを愛するよ…赤松さんより君のことが好きだ!!!』

そういって僕は夢野さんを強く抱き締めた。

二人で涙を流した後は無我夢中になった。

何処かから視線を感じてはいたが気付かずに互いの愛を確かめ合うことにした。

三田『あれはなんだ…二人の男女…まあいいか!今は他のメンバーと合流しないと…』

そういって普通の一人の青年は立ち去っていた。
肩にＵＡＯＨのマークをつけていたことを除けばだ。
ー戦闘機内部ー
俺とマジョリカは魔女について知ることにした。
そのために俺以外のメンバーは席を外していた。
レスター『まず、魔女の歴史を教えてくれ。それから入りたい。』
マジョリカ『そうじゃな。かつては魔女界とは呼ばず我々が住む場所は魔法界と呼ばれていた。
魔法界には男の魔法使いと女の魔女がいた。
魔法の力によってご先祖様たちは並行世界を渡り、様々な世界の人間と交流していたのじゃ。
四足歩行をした獣、機械で出来た生命体、火星にて常識を凌駕する文明を築いた生命体、突如体がドラゴンになる人、自然と共に生きる人、はるか宇宙に住む人、高度な技術を持つ人、恐竜が滅亡せずに人間と共に暮らしている世界などにも行った。
じゃがその全ての世界にて戦争が起きた。
謎の不死生命体、同族同士のコロシアイ、技術力の向上による自滅、力による奪い合い、一方的な差別的虐殺、闇の皇帝による侵略、傲慢な理由をつけた搾取、進化した生

命体による一方的攻撃。
それを見続けたご先祖様の中に他人に対する不信感が生まれたのじゃ。
それにより、人間と同じように男女で夫婦になり、その間に子どもが産まれていたのじゃが次第にその戦いに赴く男が現れ始めて女が奴隷のように扱われるようになったのじゃ。
魔法は戦争においてとても優秀じゃ…だが、それゆえに並行世界の人間はご先祖様を頼った。
女は自分の夫や子どもを戦争に出すことを拒んだ！
だが、魔法界の大王は逆に戦争参加を推進していった！
そして女は戦争で兵士としてではなく看護婦として出向いた…もっとも傷の手当てという名のもとなんでもやらされた。
魔法は万能ではない…それゆえに男は大量に死に女は心に傷を負った。
そして、戦争参加は魔法界の王がある魔女によって殺されることに並行世界が閉じられたことにより終結した。
レスター『なるほど…で、その魔女はどんな奴なんだ？』
マジョリカ『魔法界の王妃魔女バンドーラ…バンドーラは自らの手によって並行世界を閉じ全ての交流を絶った。

だが、戦争の後遺症は残っておった。
男が死にすぎたために男女差別が激しくなり始め、男女の仲や普通の仲は最悪となった。
そのため、夫婦の仲で出来た子どもはある者にそそのかされて自らの手で命を断ち、夫婦の仲を良くしようとする”身裂き”という風習が流行りだした。酷い話じゃろ?』
レスター『で、そんなふざけた風習を広めたのはどんな奴なんだ。』
マジョリカ『ああ…そいつの名前は皇帝ワルーサ!!五次元帝国…いや、ジャーク帝国という名を持つ帝国の支配者じゃ!!』

???????別世界ー
『さて…そっちはそっちで頑張ってくれよ。最原終一、春川魔姫、夢野秘密子。お

前たちのコロシアイ…最高に面白かったよ。』
『あやつらめ…このまま逃げられると思うとるようだが…お前にも見つけられるんかったのにどうやってその三人を見つけるつもりだ？』
『まあ、そのうち見つかるさ、もうＤＩＣＥもない。それにあの三人にはあれがあるから問題ないだろ。』
『だが、念には念をだ。しっかり頼むぞ。』
『了解だ。』（それにあの世界にはあれがある…演算ユニット…あれを木星の奴等から奪い返すために犠牲になってもらおうか…ダンガンロンパの生存者さん）

これからのあり方

ーα世界ー
ー地球軌道ー
ーナデシコ内部ー
ーゲストルームー

この艦は機動戦艦ナデシコ。
数名のクルーが火星に向かっている。
本来、この艦はユグドラシルグループの下請けのネルガル工業がプロジェクトアースと呼ばれるもののために作った艦であり、火星に行く目的などは存在しなかった。
だが、この艦に乗ったクルーは艦長の火星に行くという指示のもと火星に向かっている。
これはれっきとした命令違反で普通は捕らえようとするのが当たり前だが、数機のガンダムらしき兵器によって追っ手は破壊されたため無事であった。
火星に行く理由としては火星が謎の兵器の襲撃によって火星に住む人間の消息が不

明になっているからだ。
そして今、地球軌道上にてパトリック率いる戦闘機と鉢合わせた。
ナデシコの艦長ミスマル・ユリカという女性はパトリックと交渉することにした。
ユリカ『はーい、私が艦長のミスマル・ユリカです。ぷいっ！』
パドック『俺がこの部隊の代表!!パドック・コーラサワー!!ぶいーー！』
ユリカ『いやぁーこちらの交渉の機会くれちゃってありがとうございます！ところで、あなた達の目的は何ですか？』
パドック『それはこの世界に仲間を集めに来たんだ。俺の弟が司令をやっている艦のクルーを奴隷にしている奴から救いたい。そのためにも力を貸してくれる者達を集めているんだぜー！』
ユリカ『へぇ～弟さんが司令官。しかし、まあ私たちと交渉する気になったんですか？』
パドック『ふっふっふっ、俺も弟も美女に弱いんですよ、あなたのような美人が艦長なら嬉しいことこの上ない。どうです？私といかがですか？』
ユリカ『ははは…いやぁ…奥さん泣きますよ？あなたのことはある程度知っているんですけど…』
パドック『ぎくっ!!』

ユリカ『パドック・コーラサワー。地球連邦軍のパイロット…何人もの妻と子どももいるのに12年前に失踪…会いに行かないんですか?』

パドック『そ、それはなあ…会いに行きたいんだがなぁ…不安なんだよな…子どもに至っては俺のことを恨んでいるものもいるしな…弟にも迷惑をかけた…金はともかくな…』

ユリカ『あなたは死んでいたんじゃなくて事故で奇跡的に生還していた。ならそれでいいじゃないですか!今なら出来ます!!』

パドック『そうだな…ありがとう。で、その手を組んではくれるのか…一応俺たちにもモビルスーツは何機かあるが…そちらのえーと…エステバリスだったっけ…それはどうなの実際?』

ユリカ『まあ、最新の技術で作られているのでそんじょそこらの敵には負けませんよ!!でも~あまり戦艦から離れると行動出来ないという問題点はありますけど…』

パドック『奇襲型に向かないやつか…でも、このナデシコは大分強いんだろ?ならなんとかなるだろ?』

ユリカ『へっへーん!なんたってこのナデシコにはグラビティブラストと呼ばれるもの凄いエネルギー砲があります!!それでその敵を倒せます!』

パドック『それなら安心だな!!で、そちらの火星に住む人間の救助についても俺たち

は手助けすることに異論はない。交渉成立でいいんじゃないか？』
ユリカ『そうですね～それがいいでしょう！』
パドック『よろしくーーー！』
特に心配あるのは杏子か…
でも俺は会う気はないんだよな…
今更どの面して会えばいいんだよ…
連邦を裏切った俺なんてな…
ま、タクトの艦でやってる方が格好いいしな
ともかくこちらの戦力が整ってからもう少しこの関係を考えるべきだな。
一応、命令違反とはいえ向こうのほうが連邦の人間は信じるからな。

そうして俺とユリカ艦長の交渉はあっけないほどすぐに終了したがその後艦に確かめておきたい。
そのためにもまずはエステバリスの格納庫のところへと向かった。
新型の機械は俺にとってかなり興味があるしな。
そして向かったその場には三人の男がそのエステバリスの前にて話し合っていた。
??『だからぁ！さっきの戦闘では俺がゲキガンガーで出れば良かったじゃねぇか！』

『あのなあ！あの時はよくわからねぇモビルスーツがやっつけたからいいんだよ!!確かに?????このエステバリスの実験にはＡＥＵのモビルスーツの相手はよかったがなあ…無駄に出撃してもな…それによ、ここのパイロットは今のところお前とそこの君しかいないんだからな！』

???『俺はパイロットじゃない！コックだ！それに俺もあの日はバイト仲間の鉱太に誘われてあの場にいただけだ！』

『その通り!!だから俺がゲキガンガーに乗ってだ…ゲホゲホっ！』

ガ???????『お前は風邪引いてるんだから帰って寝てろヤマダ・ジロウ。』

ガイ『違ああう!!俺の名前はダイコウジ・ガイ!!ヤマダ・ジロウなんて名前は仮初めの名前なのだ！』

このまま聞いていても気づかれず、終わりそうにないので声をかけることにした。

パドック『おーい、そちらのお三人がた！俺はあの戦闘機の責任者だが！そのエステバリスについて教えてくれないか？』

そして声をかえると三人がこちらを振り返る。

そしてそのうちの二人は声を出し返す。

ガイ???『これはゲキガンガーだ!!』

?????『違う！エステバリスで合ってるぞ！このエステバリスはな機動性をかつてのバル

キリーやモビルスーツとはか…』

ガイ『それはいい！ともかくこれからよろしくやるんだろ！俺はダイコウジ・ガイだ！よろゲホゲホゲホっ！』

もの凄い咳を口から出すこの熱血漢の男がダイコウジ・ガイだと認識出来たがそれ以上はよくわからなかった。

アキト『まあ…よろしく、俺の名前はテンカワ・アキト…本来はコックなんだが、色々あってパイロットになってるんだ。たまたまあのヤプールとかいう宇宙人から逃げたと思ったらこのエステバリスのコックピットの中だったんだ。そして一応ヤプールが逃げたから…それで勝手にパイロットになれって言われてるんだよ！』

パドック『元軍人としては感心しないがまあ、今はそんなこと言っていられる状況ではないからな…本当に必要な時だけにしておくべきだ。』

アキト『そ、そうだよな！でもなあ…俺は火星にいる奴らを助けるためなら…』

パドック『火星？あんた火星に住んでたのか？』

アキト『ああ…そうなんだが、謎のロボットたちが現れてな…いつの間にか地球にいたんだよ。そしてそこであったのが俺の今のバイト先の恐竜やの店主の人に助けて貰ったんだ。とても感謝しているよ、こんなマークがある奴を受け入れてくれるのあの人くらいしかいないからね。』

そういってアキトは左手の甲を見せる。
そこには白い色のマークが刻まれていた。
パドック『そいつは何だ？』
アキト『そうだよなあ、これを知らない人もいるかーこれは火星に住む人間が全員つけているものでな、ＩＦＳ、ナノマシンを体内に打ち込むことで機械とリンクするんだ。
これのせいで生きていくのが難しいと思っていてな、ビートライダーズみたいに格好良いマークでもないしな。』
ナノマシン…そうか…こいつも鉄華団の奴等と同じように…
阿頼耶識と同じか…
だが背中にあるべきナノマシンの手術痕がない…
やはりこの世界とタクトの世界は違うな…
ともかく話題を逸らすか。
パドック『ビートライダーズ。ああ、あのダンスを踊っている奴らか…あいつらのことはよく分からないが…』
一応多少なりは情報を仕入れていたが…
それでもよく分からないがまあ一般常識的には覚えた。
希望ヶ峰学園やビートライダーズ、そして新たに現れた怪獣、世界の三大陣営ＡＥＵ、

ユニオン、人革連のことぐらいはな。
あと…あの不死身の化け物と魔女のこと…もな…
ちきしょう……
ウリバタケ『そういえばこのチーム鎧武にビートライダーっていう不思議な仮面をつけた奴が入ったらしいぜ、ほらこれ見てみろよ。』
そういってウリバタケはタブレットを取り出して俺に見せてきた。
そこには不思議仮面をつけた大人がリングの中で何か化け物と戦っていた。
いや、圧勝しているようにしか見えないな…
ウリバタケ『それでな、このチームはここ最近、ダンスのキレが驚異的に変わり出してな！なんかこの側にいる金髪の女が関係しているみたいだぜ。』
そうやって拡大してみると明らかに雰囲気が違う金髪の青い眼をした美女が側でチーム鎧武のダンスを見ていた。
少しむくれているけど何だ。
まあ、結構な美人だが…どこかで見た顔だな。
パドック『結構な美人だな…こいつ自体は踊らないのか？』
アキト『ああ、なんか聞いた話だと俺のバイト先の友人の鉱太がアーマードライダーとしてチーム鎧武に戻った頃に入ったらしいんだよ。』

パドック『なるほど…ちょっと気になるな…ちょっとこれ借りてくぜ。』
ウリバタケ『ああ、いいぜ。またな！次はあんたの機体持ってきてくれよな！』
そう言ってパドックはパットを持って戦闘機に戻っていった。
ーその頃…
９９年世界でのマジョリカの話は続いていた。
マジョリカ『皇帝ワルーサと魔女バンドーラは手を組み、身裂きという文化で子どもを減らしていくことにした。その結果、男女の対立は激しくなりいつしか男と女は結ばれなくなって子どもが生まれなくなってしまったのじゃ。』
レスター『しかし…今お前たちがいるということはどういうことなんだ。』
マジョリカ『男と女の体は皇帝ワルーサの魔法によって変えられてしまい、今の人間と同じようだった生殖方式が出来なくなったのじゃ、そこで現れたのがインプラントナノマシンスパート。お前たちの世界の阿頼耶識システムの原型じゃ。』
レスター『機械と人間を一体化させる技術…それがどうして魔法界と関係あるんだ。』
マジョリカ『おおありなのじゃ。まず、魔法界を男のみの世界、魔法使い界、女のみの魔女界として分断させることによって男女の争いはなくなった。そして、それと同時にそれぞれの世界にいた男と女は自分の体内に魔法を使って大量のナノマシンを注入した。

それによって男女の体は魔法界において人間と全く違った遺伝子情報を持って生まれ変わった。

しかし、後天的にナノマシンを入れたご先祖ではあまり意味がない。完全な魔法使いではないのじゃ、そこでご先祖はそれぞれの世界で花に自分とナノマシンが混ざった自分の体のエネルギーを吸わせた。

それぞれの世界で魔女バンドーラと皇帝ワルーサ以外の全ての魔法使いがな…。

ナノマシンが無機物と繋がることがここで確立され、皇帝ワルーサがそれを利用して厄祭戦にて阿頼耶識システムとして発展させたのじゃ。もっともこのシステムを作ったのはトランスフォーマーのある科学者じゃがな。』

レスター『トランスフォーマー…アメリカにいるのはわかっているんだが…もういると仮定していいのか。』

マジョリカ『ああ、ある山に行ってみろ。宇宙船がある。その中にはトランスフォーマーがおるからのう…じゃが道中にはブラックロッジの奴等もいるから…まずは恐竜カードを集めたほうがよいからエジプトに行くのも手じゃのう…』

レスター『…どういうことだ？なぜそこまでマジョリカは知っているんだ！』

マジョリカ『しまった！恐竜カードとブラックロッジのことを教えるのは早すぎたのか！しかし！そのことを知らねば…なん…いや！まずはエジプトじゃ！そこであの少

年が連れ添っていた恐竜のことがわかるからのう！さあさあ！エジプトに行くのじゃ！』

レスター『そうだな、日本には何人か残していたし…スーパー戦隊もいるしなんとかなるだろうからな…とりあえず今は深くは聞かない。安心しろ。』

（それにしてもこの動揺は一体…だが、魔女バンドーラは封印されたとわかっているが問題は皇帝ワルーサか…ジャーク帝国…くっ！まずはエジプトに行くしかないのか！）

そういってレスターとセブン２１、マジョリカ、どれみ、王ドラ、鉄華団を連れた俺たちはエジプトに向かう。

他のメンバーは日本に戻ってもらった。

今頃は戦っているが…あいつらなら無事だろう。

ー日本ー

ー戦場ー

仁『ちきしょう…なんて強さなんだよ…』

京極『これくらいで参ってもらっては困るな！我が恨みを果たすためにも貴様らには犠牲になってもらうぞ！ライジンオー！』

暗殺者としての才能

ー９９年世界ー
ー街ー
春川『ほらっ、早く逃げて！』
私の名前は春川魔姫。
今、戦場になっているこの街で崩れた瓦礫の下敷きになっている人を救っていた。
想像以上に敵の進行が早かったようだ。
地球を征服に来る奴らなら侵略の日をぐらしてこちらを嘲笑うようなことも出来るってことね…
はあ…これはさすがに予想出来なかったかも…
ダンガンロンパが放送されていた世界に行かなかったのは運が良かったと思ってる。
けど…その代わりにここに来たのはあまり良くないと思う。
夢野も最原もいなくなったし…車から投げ出されたから心配だけど…
今はこの瓦礫をなんとかしないと…

三浦『皆さん！早く逃げてください!!すぐそこに避難所があります！』
春川『これが侵略者バラノイア…ふざけて奴らだね…今、あんたのところのオーレッドはどうなってるの？』
三浦『今、採石場にて敵の隊長、マシン獣と闘っている。』
春川『なるほど…隊長格は潰さないとね…にしても来る敵はバラノイアだけなの？』
三浦『いや…どうにもこれはバラノイアだけではないらしい。この稲妻による建物の破壊…考えられるのはデンジ星を襲ったベーダー一族だな。』
春川『ベーダー一族…電子戦隊はまだなんですね…』
三浦『あ、ああ…やけに遅いな…何かあったのか！』
ビーピー！
三浦は鳴っていた通信機を手に持ち通信し始めた。
三浦『こちら三浦だ！どうかしたか！』
通信兵『大変です！隣の美空町で黄色のロボットと白色の化け物が戦って暴れています!!それに側には恐竜らしき小型ロボットが人間を攫っています!!すぐさま部隊の指示を！』
三浦『しまった!!奴らめ…ジャーク帝国と京極慶吾か！それにまさか…恐竜らしき小型ロボット…ジャーク帝国やバラノイアともとれるが…ザウルス帝国…そんなまさか

…ともかく！住民の避難を優先しろ！戦闘機部隊は爆弾よりバルカンによる攻撃を集中的にしろ！敵は大きいからよほどのことが無ければはずすことはない！戦闘機部隊は全機発進!!』

よくわからない組織の名前が聞こえる。

大分不安は拭えないがそのまま活動を続けていった。

通信兵『了解しました！ちなみに黄色のロボットは少し前に現れた排気ガスをばら撒く敵を倒しました。エネルギー切れのように倒れていますがこちらを攻撃する様子は見られませんでした。』

三浦『前に見たあのロボットか…もしかしたら友好的な宇宙人かもしれない！無闇に攻撃するな！わかったな！』

通信兵『了解！』

そういって三浦さんは通信を切った。

私はその間に他の人を助けていたがやはり数が足りない！もうあと二人…あと二人でもいいからここに来てくれれば数が足りる。

私は人を殺す殺し屋の才能を持っている。

だからこういうことは不慣れなせいか苦労しているからかもしれない。

どうすれば…

ウーウーウーウーウーウーウーウーウー!!!!
そんな時に赤いサイレンを鳴り響かせ、こちらに向かって来る集団を見た。
春川『えっ…誰!』
私はあまり驚かなかった。
いやというよりも驚くということを忘れたのかもしれなかった…
ワオーーーーン!!!
そのころ採石場では…
オーレッド『うおあった!!てやっ!はあっ!!スターライザー!』
オーレッドに変身した吾郎は採石場にてマシン獣と大量のバーロ兵を遠くの敵をビームガンで撃ち倒し、近くの敵をバッタバッタと斬り倒している。
まさに一騎当千!!
敵の槍を肘で退け、顔をパンチで殴り壊して圧倒的数の差をなくしている。
バーロ兵などが５００体いても全く相手にならないといっても過言ではない。
それを見たマシン獣はオーレッドに突進していった。
マシン獣『…!』
オーレッド『はあっ!!秘剣・超力ライザー!!!』
オーレッドはマシン獣の攻撃を避け、マシン獣を一刀両断し、爆発させた!!

その様子を見ていた四人の隊員は驚いていた。
そして、オーレッドは近寄ってきた。
オーレッド『よしっ!!ここは終わったな!俺は今から美空町に向かう!!それぞれの隊員はあの森に戦闘機で運んできた車に乗って基地にむかってくれ!美空町に化け物が出たから俺はいけない!基地の場所はそこにある地図で確認できるはずだ!だが、その前に名前の確認だ!点呼!』
四日市『四日市昌平中尉であります!!』
三田『三田裕司中尉であります!!』
二条『二条樹里中尉であります!!』
丸尾『丸尾桃中尉であります!!』
オーレッド『自分は君達の隊長となるオーレッドだ!!よしっ!これから作戦行動開始!返事はオーレ!だ!』
四人『オーレ!!』
その時…美空町では…
仁『はあっ…はあっ…くっそ!!このままじゃやられちまうぞ!なんか武器はないのか!』
ライジンオーというロボットが京極慶吾の乗る魔操機兵と呼ばれるロボット新皇が

戦っていた。
というより新皇がライジンオーをいたぶっていた。
飛鳥『ゴッドサンダークラッシュはエネルギー切れで使えない!!あの恐竜ロボットがエネルギーを吸ったんだ!それにこの連戦じゃあ…』
俺たちはこの白い奴と戦う前に黄色のロボットと戦っていた。
苦戦したためにエネルギーが減っていた。
それに加えて謎の恐竜ロボットがライジンオーの足を噛んでエネルギーを更に吸ったのだ!
吼児『どうする!このままだと…やばいよ!』
仁『ちくしょう…隣町は宇宙人が来てるし…くそっ!ライジンシールドを投げつけるか!』
飛鳥『この状況で盾を失うのは危険だ!とにかく奴の弱点を見つけてそこを攻撃するしかない!しかしなんとか奴を足止めしなければ…』
仁『ちっ!なんとかその弱点を自力で見つけれれば…ん!なんだ!空からなんか来たぞ!!』
俺たちがなんとかライジンオーを起き上がらせようとした時!色取り取りのロボットが空から飛んで来た!!

『見つけたぞ!!デストロン!!』

飛鳥『なんだよあれ…』

??別世界ー

??????『さてと…そろそろエルシオールを手に入れてくれよ。テイワズの船をエルシオールに見立てて威嚇する意味はないことに気づけ。まあいいや、ともかくキュウベえとりあえずその娘を頼むぞ。しっかり送っとけよ。』

キュウベえ『へえ…面白い思考だね。まあ彼女は絶対にそれを望むだろうね。人間の血の繋がりは何よりも重いと言われてるみたいだからね。にしても余りにあいつらに都合が良すぎて怪しまれないかい?』

『ここまで順調に奴等は戦力を整えた。まあ、少しぐらい不自然に感じてる奴等もいるだろ。そこで一定の答えをやるのさ…そうすれば良いだろ。それがお望みなんだろ?』

キュウベえ『やっぱり君はわかってるね…まあいいや、ともかく電子世界のことは任せてよ、火星のことは任せたよ。』

臆病なほど司令官

ーＰＤ世界ー
ー戦闘機ー
ー司令室ー

タクト『さてと、俺たちはこれから他のメンバーと合流しようと思うんだが…みんなはどこに合流したい？俺はジャックのところなんだよねー。』

ミント『そういうことは司令官がやるものじゃないんですか…普通？』

タクト『いやあね、俺も全然それでいいと思ったんだけどさ～参考程度にみんなの意見が聞きたくなったんだ！だってどこに行くにしても京極慶吾がいる可能性も考えないといけないし、それにチェリーっていうマリオネットも早めに回収しないといけないとかあるからね。』

小樽『そうは言ってもよお、俺はライムを起こすことが出来たがチェリーは別の奴が持ってったんだろ。なら、ライムとチェリーは別のマリオネットと仮定すべきじゃないのか？なあ、ライム？』

ライム『うーんとねー…よくわかんない！』
小樽『ありゃりゃ。』
カンナ『けどよーそのチェリーを探すにしても心当たりなんてありすぎてよくわかんねぇよな、あのハカイダーって奴のせいじゃないのか？だったらそいつがいる世界に行くべきだろ。』
タクト『その線が大分あるんだよね～でもそれはそう考えたとしてもマリオネットを本来とは違う方法で起き上がらせることの技術を持つ組織は現状だとバラノイアかそのハカイダーを送ったやつなんだよねー。』
ミント『そうですわね、マリオネットは不思議な機械…それについてはヨロイやイクサヨロイ、ガンダムフレームとも全く異なるロストテクノロジーですから…』
アキヒロ『わかるとしたらバラノイアとあのハカイダーしかないというわけか。で、そいつらに会うためにも他の部隊と合流か…』
カンナ『一番不安そうなレスターのところに行けばいいんじゃねえのか？』
タクト『たしかに現状だとそこが一番不安なんだよ。だけどね、だからこそまずは戦力を整えてレスターの世界に行くためにもジャックかパドック兄さんのところで戦力を整える。俺も司令官としてやれることはあるんだからね～ただ昼寝してるわけじゃないんだ。』

クーデリア『…だったら私はジャックさんの部隊と合流した方が良いと思います。』
アキヒロ『…こっちの機体のダメージのことを考えるとそれがベストか…京極慶吾に会う可能性は低くなる。』
ミント『…なら最初からタクトさんの案がベストでしたのでそのまま行けば良かったですのに。』
タクト『…俺はさあ、別に他の案でも良かったんだよね。可能性はともかく俺はみんなの意見を聞きたかった。誰の意見も聞かずにこんな馬鹿みたいな反乱を成功させるほど俺も優秀じゃないんだよ。』
クーデリア『ザールを相手にする…それだけでも大変なのに…バラノイア、ベーダー一族などの勢力があるからこそですね。』
アキヒロ『普通の指揮官ならもっと自信満々にクルーに接するもんだがあんたは全く逆だな。』
タクト『あったりまえじゃん！まあ、でも成功するとは思ってるよ！思うだけならやりたい放題だからね！』
小樽『おめえさんはよおなんか他の奴とは違うなあ！』
ライム『違うよー違うよー！違うよー！』
タクト『ともかくジャックのとこまで全速前進！戦闘機を動かすぞ！』

クーデリア『東の星…西の星の前に色々と見ておいて勉強になりますね。』
ミント『東の星と西の星は大分違いますことよ…最もあの場所以外はね…』
クーデリア『あの場所？』
ミント『悪党どもの溜まり場…西の星の汚点…エンドレスイリュージョン。』
俺はそのまま戦闘機で皆を乗せてジャックたちの部隊のいる東の星に行った。
その頃…同じ世界であるプロジェクトが進行していた。
ー竜宮島ー
ーアルヴィス司令室ー
ここはＰＤ世界のアルヴィス。
地球を襲う化け物フェストゥムと戦う組織である。
僕は父さんと共にある計画を立てていた。
??『これが計画の全貌だ。このＬボートで奴等をおびき寄せる。』
??『作戦の成功確率は高い…だが…奴等の妨害があるとも言えません。』
??『ギャラルホルンに…ザールか…』
??『これまでは宇宙海賊によってザールからの支援物資や技術提供を妨害されたことによってギャラルホルンとヴェイガンは大きな戦いに発展しませんでしたが京極慶吾という巨大な駒を手に入れたことによってそろそろギャラルホルンとヴェイガンの激

しい戦争が起こります。』

??『無論、そのことと考えねえばなるまい。そして、もう一つはこれだな。』

??『この資料…まさか…』

??『そう、アローンそしてシャドウだ。』

??『アローン!!そんなアローンはこの島ではなく…あの島の管轄じゃないのですか！奴等の目的は至源エンジン。竜宮島には至源エンジンの類は使っていない！それにシャドウはこの世界に…』

??『アローンがここにこの来ないのはフェストゥムがいるからという可能性も示唆出来ない。それにシャドウはギャラルホルンから盗み出したデータの中にこの世界に来たという記録があったのだ。』

??『キュウべえの言ったことが現実になるんですね、父さん。』

皆城『ああ…だからこそ必要とされるのはL計画、そしてファフナーだ。だが総士…ザールやギャラルホルンの奴等を相手にパイロットたちは戦えるのか？』

総士『確かにギャラルホルンにあるガンダムフレームやイクサヨロイ、ロストテクノロジーを使った紋章機などには性能面では劣ります。しかし、ジークフリードシステムを使えば手はあります。』

皆城『……ジークフリードシステム…負担が大きすぎるが仕方ないか。』

総士『…他の負担のないシステムを使ってもフェストゥムには勝てません。我々が戦うのはあくまでフェストゥムです。』

皆城『わかった。しかし…このL計画に一色健次郎さんがいないのは痛手か…』

総士『大島はもうここことは違います。パレットシステムのようにうまくやることは我々には無理でした。』

皆城『同化も計算のうちか…医療技術は進歩しない…もし…彼女が来てくれたならば…』

総士『帝国華撃団イリス・シャトーブリアン、巴里華撃団エリカ・フォンティーヌ…彼女たちがこの世界に来ると言ったが可能性は低すぎます。例えどちらかが運良く来る可能性なんて天文学的な数字です。』

皆城『そうだな…さて、計画の発動のためにファフナーのティターンモデルを…』

ファーファーファーファーファーファー!!

皆城『なんだこのサイレンは!』

要『島上空にアンノウンが二体戦っています!!!一つは怪獣…もう一つはロボット…ファフナーとは違うロボットです!』

総士『こちらの場所はばれてないんですか!』

カモフラージュでこの島は外部からは見えない。
そのため、特殊なセンサーでもなければ外からはこの島は見えない。
溝口『今のところはわからねぇがあのロボットのほうがこっちを見てやがる！いや…怪獣のほうもこちらを見てる…』
皆城『第1種警戒発令!!二つのアンノウンについての監視を怠るな!!だが、こちらからの直接的な武力は見つからない限りするな！』
総士『父さん…やはりキュウべえの言った通り…』
皆城『あのアンノウンの怪獣は超獣だろうな。』
総士『しかし、あのおたまやら炊飯器がついたロボットは一体…』
皆城『わからん…しかし…あの超獣を我々はどこかで…』
総士『…』
僕も同じように今の状況がわからずにいた。
しかし、数日前に現れたキュウべえは面白そうにこちらを見て話していた。
これから起こる驚異のこと…そしてある気になる一言を…
『蒼穹の空を求めし天使、海の巨人により禁断の箱を開けし時…黒き怨念とともに繰り返さん。円環の理を抜かたくば跳躍を乙女とともに封印させん。』

…

……

……

……

……

僕たちはまだ生きている…だが、この命は生きている。
いや、わからない。まだわからない。
この理とは…なんだ。
だけどここまで来たらやるしかない。
戦いはもう避けられないのだから…

激突！新皇対トランスフォーマー

ー９９年世界ー
ー美空町ー
ー町中ー
コンボイ『サイバトロン軍団!!アターック!!』
ラチェット『ほらよ!!』
バンブル『くらえってんだい！』
町に現れた巨大な敵、京極慶吾に向けて空からたくさんのロボットがビーム銃を撃ちながら現れ、大地に足をつけた。
京極『貴様らは…トランスフォーマー!!なぜここに…くっ!!デストロンが蘇った以上仕方ないことだったか…だが！貴様らに私は倒せんぞ！むはははははははは！』
京極は自らの周りにバリアを張ってトランスフォーマーたちのバリアを防ぐ。
ホイルジャック『コンボイ司令官！あのバリアは特殊なエネルギーによって作られています。装甲はそれほど厚くないのでバリアを破壊すれば我々の攻撃が通じます！』

コンボイ『エネルギーのバリアを壊すには更に強いエネルギーをぶつければなるまい。よしっ！私がやる！』
コンボイは自分の右手にオレンジ色のエネルギーの斧を作り出して京極慶吾に向かう!!
そしてそのバリアにその武器を振り下ろすがバリアはびくともしなかった。
それどころか…

ギャオーッ!!!
そこら中から現れた小型恐竜ロボットがトランスフォーマーたちのエネルギーを吸うべくザウルス帝国の恐竜ロボットが彼らの足元に集まって来た。
バンブル『なんだよこいつら！』
ホイルジャック『そいつらはザウルス帝国とかいう奴等の兵器らしい!!そいつに噛まれるとそこのロボットみたいにエネルギーを抜き取られてしまうぞ！』
そう、ライジンオーはすでにボロボロであり、ここから勝つのはかなりの苦難であった。
そのタイミングでトランスフォーマーしかもサイバトロンが来たのはついていた！
コンボイ『そこのロボット、大丈夫かね？』

仁『あ、ああ…助かった…しかしあんたらはあの白いやつの仲間じゃねぇのか？』
コンボイ『私達は超ロボット生命体トランスフォーマーの平和を愛する集団サイバトロンだ。』
飛鳥『ロボット生命体…宇宙から来たのか…』
ラチェット『ああ、その通り。俺たちはここにトランスフォーマーのデストロン軍団という宇宙征服を企む奴等と戦うためにやってきたんだ。そこの白い奴はデストロンかどうかわからんが町をこんなにしているんだ。
他の星のこととはいえほっとけない。』
吼児『ありがとうございます!!』
仁『よっしゃ!!これで数はこっちが圧倒的に有利だぜ!!』
京極『貴様らのことは聞いているぞ…トランスフォーマー…バラノイアやメガトピアどもと同じような奴等…我々の計画には邪魔な存在…よって貴様らをスクラップにしてやるわ!!』
京極はサイバトロンに向けて町を破壊しながら突進してきた！
京極慶吾のバリアを張りながらの突進により、武器が通用しないのでサイバトロンたちは空へと飛び難を逃れた。
バンブル『ちきしょう！あいつのバリアがなけりゃおいらたちだって上手く戦えるの

に!』

コンボイ『あのバリアを破る方法は…』

勉『すいません、コンボイさん…ここは一か八かやりたいことがあるんですけど。』

学校から指示を出して勉やマリアがコンボイに連絡を取る。

コンボイ『わかった。なんでもいってくれたまえ。』

勉『あのバリアは龍脈の力によって作られたものです!前に歴史の勉強で習った通りなら…あのロボットには弱点の部位があります!何か不自然に隠しているところを見つけられれば…』

バンブル『なるほど!にしてもなんでそんなことわかったんだい?あいつが前にも出たことあるのかい?』

吼児『あっ!わかった!思い出した!サクラ大戦だね。』

仁『サクラ大戦…?なんだったっけ…』

飛鳥『やっぱりな、お前…少し前の社会の日本の歴史でやったろ。大神一郎さんがかつて戦った記録小説”サクラ大戦”お前も名前は聞いたことあるだろ?どうせ寝てたんだろ。』

マリア『勉強してなかったつけが回ってきたわね。』

仁『うっ!歴史の勉強はしとくもんだな…』

コンボイ『よしっ！そのことがわかったのはいいがあのバリアをどうするかだ…』
勉『それも手はあります。あのロボット新皇は龍脈からエネルギーを使って動かしている。ならばそのエネルギーを断てばいいんです。仁！ライジンオーの盾を地中に思いっきりぶっさして雷を流し込んでください！
時間をかけて流し込めれば龍脈のバランスが崩れてあいつはバリアを維持することが出来なくなります！』
コンボイ『我々はそれまであいつを食い止めるぞ!!サイバトロン軍団アターック!!』
サイバトロンたちは新皇にビームライフルを撃ち出して目をこちらに向けた。
京極『ぬうううううっ！貴様らトランスフォーマーはこの地球に来た目的は侵略ではないのか！』
コンボイ『違うな。私は同胞がそのような愚かな行為をしているからこそここに来た。そしてお前達はデストロンでないこともわかった。だとしても我々は戦う！貴様のようなやつを許すわけにはいかない！』
レッドアラート『その通り!!』
クリフ『おらおらおら！芋虫野郎！とっととてめての体の色を白から真っ赤に染めてやろうか!!』
アイアンハイド『その見下した面を引きずり出して細切れにしてやる!!』

ライジンオーを守るようにサイバトロンが京極を挑発しながらビームを撃つ。
ザウルス帝国のロボットも同じようにサイバトロンたちは蹴散らしていた。
インフェルノ『どんどんきやがれチビ恐竜ども!氷河期で死んでおけばいいと思うほどバラバラにぶち壊してやる!』
ストリーク『文字通りてめえらを粉々のスクラップにしてやるぜ!』
勉『仁君!そこです!そこに盾を埋めてください!』
仁『わかったぜ!』
ライジンオーは手に盾を持ち、地中に盾を入れた。
ひろし『エネルギー収束７０％!』
ゆう『８０…９０…１００％!いけるよ!』
仁『いっけえ!』
ビュイーン!!!
京極『なんだと!!』
新皇のバリアが龍脈の変化により、なくなった。
コンボイ『今だ!あの弱点を総攻撃!!』
アイアンハイド『うおおおおおお!』
サイバトロンの総攻撃が始まった。

ライジンオーはその場でエネルギーを流し込み続ける。
新皇は大分ダメージを喰らい始めた。
それにより、京極は苦しみ出す。
京極『ぐわっ…ここまでやるとは…だが…やられはしない。行けええ!!ムササビラー!!』
新皇から茶色の怪物が出てきて、羽を羽ばたかせ、武器のカッターがサイバトロンを襲う!!
ゴング『すばしっこいやつか!ちっ!撃ち落としてやるか!』
サイバトロンはビームを撃つがムササビラーのスピードは速く、サイバトロンの武器は次々と破壊された。
あきら『サイバトロンの武器が…』
飛鳥『こっちは動けない……新皇のバリアが消えてしまうからな…』
マリア『あのムササビラーをなんとかしないと…』
吼児『カクレンジャーやジェットマンがいればなんとかなるかもしれないけど…』
仁『俺たちでなんとかするんだ。ライジンブーメラン!!』
ライジンオーは羽根を取って、ムササビラーに投げつけるがやはり避けられる。
ムササビラー『無駄だ!!』

ムササビラーは自分の羽根を広げてライジンオーのコックピットに向かってきた。
この体制から時間的に避けられない!!
さあ、どうなる!
仁『ちきしょう!!』
ムササビラー『とどｍ』
シュラッ!
オーレッド『秘剣・超力ライザー!!』
ムササビラー『な、何いいい!うわあああああっ!!』
一瞬の間に赤い姿の男がもの凄いスピードのバイクから飛び、ムササビラーの体を一刀両断した。
オーレッド『大丈夫かい?』
マリア『はい…あなたは?』
オーレッド『俺の名前はオーレッド。超力戦隊オーレンジャーのオーレッドだ。』
飛鳥『超力戦隊…オーレンジャー…』
吼児『新しいスーパー戦隊…』
仁『よーし、反撃するぜ!トランスフォーマー!』
ホイルジャック『だがもう武器はない。銃はもう壊されてしまった。』

ラチェット『今から直していてはライジンオーのエネルギーが切れる。』
クッキー『ただでさえ恐竜ロボットによってエネルギーが減らされているのに…』
勉『恐竜ロボット…そうか…恐竜ロボットです！恐竜ロボットの体にはライジンオーのエネルギーを吸い取ったタンクみたいなのがありませんか！』
バンブル『え？そういやそうだね…お、あったよ。』
バンブルは恐竜ロボットについていたタンクを取り、ライジンオーに向けて振る。
勉『それです、そのタンクをあの新皇の弱点にたくさんぶつければ…』
コンボイ『了解した。今は少年達を信じよう。オーレッドどの、紹介が遅れたが私の名前はコンボイ、サイバトロン軍団のリーダーだ。セイバートロン星からきたものだ。いきなりで悪いが信用してほしい。』
オーレッド『わかっている。君たちのことはデンジ星の使者から聞いている。俺は側にある残骸からエネルギータンクをそちらに送る！』
そういってオーレッドは素早い動きでエネルギータンクをコンボイに渡す！
コンボイ『ようし！投げまくれ!!』
サイバトロンたちは弱点めがけてタンクを投げた。
??????『ぬうう!!』
??????『もういい、早く戻ってこい。』

京極『なんだと！私はまだ全力を出してない!!それにまだ華撃団の奴等は…』
??????『もう大丈夫だ、ライジンオーのことはよくわかった。あとは五次元帝国に任せればいい。それにお前にとって俺はなんだ？』
京極『わかった…』
新皇は体からビットを出して戦場にビームを放ちながらその場から撤退した。
吼児『…逃げていったね…』
オーレッド『京極慶吾…厄介な奴が復活してしまった…しかし…今は！』
ゴング『オーレッドさんよ、どうかしたのかい？』
オーレッド『ただいま、隣町で戦闘が起こっている。すぐに援護に…』
ビピーッ!!
オーレッドは通信音を聞いて通信を開く。
オーレッド『どうしました！』
桃『隊長…ただいま、市街についたところ戦闘が終了していました。
どうやら倒したのはデンジマンと…犬型のロボットとピンク色の戦艦です。』
オーレッド『なんだと…犬型ロボットに巨大戦艦…とりあえず救助を行うんだ！俺は宇宙人と遭遇した。俺は後で向かう！』
桃『は、はい！』

オーレッド『ピンク色の戦艦…』
仁『な、なあ…隣町は大丈夫なのか？』
オーレッド『ああ…にしてもそのロボットに乗っているのは子どもたちなのか…』
飛鳥『やっぱりか…そりゃあそうだな。』
吼児『ご、ごめんなさい！』
オーレッド『謝ることはない。君たちはこの街を守った。我々が本来は戦うはずなのに準備に手間取ってしまったんだ。こちらこそすまない。』
仁『いやいやそんな。』
オーレッド『だが、そのロボットについては調べさせてもらう。トランスフォーマーの皆さんには私どもの基地に来てほしい。君たちもだ。』
勉『わかりました。しかし…』
オーレッド『町が壊れたのが辛いのか…本当にすまない。』
クッキー『……はい…』
オーレッド『全力を挙げて我々がこの町を直して…
ポン!!!
ラチェット『あれ。直ったぞ。』
オーレッド『な、何いいいい！』

ーＭＡＨＯ堂ー

??『よっと、とりあえず町は直しといたけど…この世界にいるのか?』

???『ええ…この世界に魔女がいる。』

??『テリトリーから外れるがまあしゃあねえか…ほらよ!出て来なよ!この世界の魔女ども!!』

そう言って赤髪の女の子と黒髪の女の子はＭＡＨＯ堂へと入っていった。

作戦名ＣＲ　Ｅ

ー東の星ー
ー機動艦ー
ー村ー
ジャック『そろそろか…』
俺の名前はジャック・シンドー。
エルシオールの副官だ。
戦時緊急措置のため副官になったが…まあ、どちらかというと俺は戦闘要員だ。
なぜなら…
グレート『ああ、タクトたちはどうやらマリオネットを数人連れてきてくれるようだし問題はないだろう。』
俺の中にはウルトラマンがいる。
その名はグレート、ウルトラマングレート。
新しいヒーローとなる存在がいるんだ。

俺は一回死んだのだ…
その時にグレートによって俺は助けてもらい今は一つとなって巨大化して戦っている。
ジャック『パドックさんはレスターと合流できたみたいだし、もう行く戦力は整ったか…』
俺たちはタクト、レスター、俺、パドックさんの４つに分かれて戦力を集めにいった。
なぜなら、俺たちは宇宙のほぼ全てを侵略しているザール星間帝国と戦っている。
そのためにもザールによって奴隷として売られている俺たちエンジェル隊の仲間を救わないといけない。
しかしあまりに戦力が足りないため４つに分かれていたのだ。
そしてやってこさ、その目処が立ったので合流したのだが…
タクト『よっー！久しぶりー！ジャック！グレート！』
ライム『お！なんかかったそー！』
この追加メンバーの個性豊かにびっくりしたのだった。
タクト『言ったでしょライムちゃん。この世には小樽君とは違った男もいるって。』
小樽『おいおいおい！そりゃあねぇよタクトさん…おいらがひよっこなのは認めるこどよ。』

ジャック『き、君たちが参加したライムちゃんと小樽君だったね…』
小樽『ああ、知っての通りおいらの名は小樽。テラツーのジャポネス出身だ。』
ライム『ライムだよー、よろしくねー。』
ジャック『よ、よろしく。あ、あとそうだ。実は俺の体の中にはウルトラマンという巨人がいて名前はグレートっていうんだ。』
グレート『よろしく頼む。』
小樽『へぇー、まあよくわかんねえが二人いるって事でいいな、頼むぜ。』
ライム『よろしくーー!』
と、まあ戦力というか社会科見学の参加者が集まった感じだ。
まあ、ジャポネスのほうではハカイダーなんていうのを聞いて驚いたが…
カンナ『すまねぇな…あたいはヴァニラが戻るまではどうにも体が上手く動かせねえみてえだ。』
ジャック『いや、エリカさんがパドックさんのところにいるみたいだからそちらでもなんとか大丈夫ですよ。』
カンナさんの戦線離脱は驚いた。
カンナさんの怪我自体はヴァニラのナノマシンでなんとかなるが、光武の状態がよくない。

まあ、ドラえもんのタイム風呂敷でなんとかなるとは思うがそもそもこの機体はダメージが大分あった。
長年のダメージが悪化したようだ。
こればっかりはどうしようもない。
そもそもの霊子甲冑はまだまだ謎が多く、ＥＸＡ－ＤＢで調べられないことばかりなので完全に直すことは厳しいみたいだ。
元々戦力の割り振りが大分少なく一番安全だと思っていたテラツーにタケダ軍がいたんだ。
アキヒロとカンナさんだけでよくやれたと思う。
俺たちのほうも戦力はそんなによくはなかったのでほとんど戦闘がないのは幸運だった。
戦力の割り振りではこちらは3番目だったのでまあ悪くはなかった。
メンバーを四つに分けたことは成功か失敗かというと成功と言える。
結果を見たらこうなっていた。
パドックの世界メンバー
エリカ・フォンティーヌと合流。
ヤマトガンダムの確認。

ナデシコメンバーと同盟を結び、エステバリス、機動戦艦ナデシコをＧＥＴ！
ソレスタルビーイングが世界に戦線布告、同盟を結ぶ可能性あり
怪我人ゼロ。
東の星メンバー
タケダ軍の残党イクサヨロイとの戦闘にてパーツをＧＥＴ
怪我人ゼロ。
俺たちの戦いや記録がノブナガによって一部露見していたため、スパイとして捕らえた。
惑星テラツーメンバー
タケダ軍との戦闘により、アキヒロが負傷、カンナさんが戦線離脱、ドラえもんのタイム風呂敷でも復帰は微妙。
小樽、ライムが参加。
ハカイダーというロボットと遭遇。
チェリーというマリオネットが敵のある勢力に落ちたらしい。
どれみの世界メンバー
ただいま現在状態は不明だがエジプトにて恐竜カードを探しに行っている。
ライジンオーチームは日本残留。

こんな所か…まあ、怪我人はほぼいなくて助かった。
カンナさんの怪我もまあヴァニラかエリカさんがいればなあ…
タクト『ともかく！俺たちはこのメンツでギャンブル惑星モナカへと明日、向かう!!パドック兄さんのチームはもうレスターの所に向かったっていったし、俺たちは俺たちで行こう！そろそろエルシオールメンバーの月の巫女を助けないとな…』
グレート『生きていればなんとかなるがな…』
小樽『おいおい、そんな湿っぽいこというなよ！助け出すったら助けるでいいだろうがてやんでい！』
タクト『ああ!!この作戦には全力を尽くす!!作戦名はＣＲ　Ｅだ！』
ジャック『なんだその作戦名は…』
タクト『キュートレスキューエスケープの略だ。簡単かつシンプルだろ？』
…こいつの発想らしい。
可愛い女には昔から目がないけど変わってないなあ…
よく俺やレスターが貰ったバレンタインチョコを泣きながらスタンレーと食ってたな。
昔

ー士官学校校門ー

スタンレー『今年も俺たちはこんなもんか。』

タクト『ああ、だがなあ！自分たちが思いを込めたチョコを俺たちが食うことによって一種の背徳感が生まれるんだ！』

スタンレー『それは言えてるな!!』

とかなんとかいってこっそりスタンレーは一、二個貰ってたんだよなあ…

たまに食ってる姿を女子に見つかってタクトがボコボコにされたのは言うまでもない。

スタンレーは逃がされてたけど。

しかし、学校のレスターファンクラブに水着写真とか提供していたおかげでボコボコにされただけで済んだんだけどな。

ほかにもこんな日が…

タクト『へっへへー今日は取れたて生写真！今ならなんと！プラスαでなんかつけちゃうよ！さあ、買った買った!!』

ファンクラブ会員『きゃあーーー！』

レスター『タクト!!お前なあ…』

バタ！バタ！

レスターを見た何人かの会員メンバーが倒れていった。
タクト『おお！本人の登場かあ！よかったよー更に人が増えるぞ!!』
レスター『勝手に取られる俺の身になってみろ…』
タクト『あのなあ！売ってる写真は俺やジャック、スタンレーと一緒の奴もあるんだぞ！それにな毎回毎回その場で写真の俺の顔にバツマークがつけられたり切り取って捨てられる俺の身にもなれ！』
レスター『どんな反論だ!!』
ジャック『まあまあ、レスター、その金を募金しているから何にも言えないだろ、な！』
レスター『はあ…わかってるがな…』
ジャック（端数はタクトの貯金になってるがな…レスターに知れたら面倒になりそうだ。
しかし、これをやめたらファンクラブ会員がショック死するしな…）
スタンレー『ファンクラブ会員はお前に触れるだけで鼻血を出す奴もいるからな、気をつけろよ。』
レスター『そうか…』
懐かしいなあ…ま、タクトもレスターだからこそ一番戦闘や精神的に大変などれみ

ちゃんの世界に行かせたんだけどな。
どれみちゃんやライジンオーチームはまだ子どもだ。
そういうサポートはレスターが適任だ。
あいつは優秀なだけじゃない。
誰かを許す度量もある。
ただ甘やかすだけじゃない、厳しそうに見えるが厳しいだけじゃない。
それがわかってる
ー現在ー
タクト『……なあ、ジャック。ちょっといいか？』
タクトが険しい顔をしてこっちを見てきた。
こういう時は本気の顔をだな。
俺はともかく戦艦の俺の部屋へとタクトとともに向かい話を始めた。
タクト『ジャック、今回の戦い…わかってると思うが俺たちは負けてる。』
ジャック『ああ…こればっかりはレスターやパドックさんも知ってるだろうな。』
タクト『なあ、ジャック。俺たちはどこで間違えたんだろうな、エルシオールメンバーは生きてる。いや、生かされ続けていると思うんだ。』
ジャック『……ザールだからな…精神制御か四股切断、感覚遮断…考えられる拷問は

やってるだろうな、精神が壊れていない奴はいないだろうな。』
タクト『ああ、だから俺はある伝説の書を取りに行く。』
ジャック『伝説の書？』
タクト『ああ…俺のばあちゃんが言っていたんだ。ある異世界の山にて眠る伝説のせいなる本…”ブックラこい～た”。』
ジャック『ブックラこい～た…そいつをお前だけで取りに行くのか？』
レスター『いや、俺とカンナさんとエリカさんとジョウ君で行ってくる。そんなに時間はかけない。それに、タケダ軍が襲ってくる可能性もあるんだ。そこで、お前とレスターに頼みがある。レスターは記憶で俺以外が見たウルトラマンを探しにそしてジャックはタケダ軍に備えて待っていてくれ。』
ジャック『また部隊を分けるのか？俺はあまり賛成しないんだが…』
タクト『レスターの方にはエルドランチームとどれみちゃん、そしてドラえもんたちだ。まあ、遠足感覚でウルトラマン探しだ。あの世界にはウルトラマンがあった。それは何か重要なのかもしれない。』
ジャック『で、その間俺に残りメンバーを何とかしてほしいと？』
タクト『お願い！パドック兄さんかジャックしか頼めないんだけどパドック兄さんは指揮よりも現場派だからな！な！』

ジャック『それはいい。だが…その間のエルシオールメンバーを見たエンジェル隊のメンバーは…それを理解した上でか…』

タクト『だからこそここでお前に話したんだ。…俺は時には厳しくやる…彼女たちは自分たちがどうやって負け、どんな結果になったのかをしっかりと見て欲しいんだ。』

ジャック『そうだな、俺はお前のそういう所は悪くないと思っている。ただ甘やかすだけの奴なら俺やレスター、スタンレーは友だとは思わなかった。よし、任された。』

タクト『だが、ブックラこい～たの回収は速やかに行う！その前に救出だけどな、そんじゃ今日は休め。』

そう言ってタクトは部屋から出て行った。

グレート『タクトは誰よりも厳しいのだな。』

ジャック『ああ…それがあいつだ。タクト・マイヤーズだ。』

もう一人の巨人

ー９９年世界ー
ーエジプトー
ーピラミッド前ー
レスター『さてと…ここにあるんだな…その恐竜カードという奴は…』
俺の名前はレスター・クールダラス。
この部隊の指揮官である。
かつてはトランスバールの軍人として働いていたのになんの因果かこんなとこにいる。
まあ、仕方ないといえば仕方がない。
俺たちのトランスバール皇国軍はクーデターにより、ほぼ全滅。
残ったのは辺境も辺境、ヴェイガンが住んでいる火星勤務の俺たちだった。
何年も前から戦争をしていた地球と火星のヴェイガン。
メソポタミアプロジェクトにより、火星に追いやられた人類がスペシウム鉱石によっ

て様々な病気を発病。
そのため、彼らはヴェイガンとなってモビルスーツを開発、かつての故郷地球をエデンとして移民しようとした。
だが、地球はメソポタミアプロジェクトの続投を宣言、火星の人間はどんどんと死んでいった。
”他の星で成功しているにも関わらず…この軟弱者どもが!”
”地球はまだ完全に再生出来ていない!”
といった意見が地球で出来ていた。
そのため、ギャラルホルンの当時のセブンスターズは火星圏の移民を拒否した。
その後も火星圏にて大量の死者が出た、それでもギャラルホルンは現状を無視し、医療支援などもせずに放置したままだった。
そしてとうとうヴェイガンはこの状況を打破するために極秘裏に手に入れた厄祭戦のデータを集めてモビルスーツを作り出した。
そうして、ヴェイガンはまず手始めにコロニーに侵攻して多くの人間を殺した。
その後、厄祭戦のデータをＥＸＡ－ＤＢから手に入れたギャラルホルン、伝説のガンダムフレームのデータが入ったＡＧＥシステムを少年フリット・アスノが解析し、ガンダムＡＧＥ－１により、ヴェイガンの侵攻を退けた。

しかし、ヴェイガンはその後も戦力を整えては地球を攻めた。
その度にガンダムとギャラルホルンによって敗戦を続けていた。
だが、そんな彼らの対立に一手をかける存在が現れた。
フェストゥム
金色の姿をした固形の生命体。
『あなたはそこにいますか?』
という問いをする妙な生命体である。
彼らは火星やコロニーを狙わず地球を狙ってきた。
これにより、まず日本人がフェストゥムの侵攻によって受胎能力を大幅に低下させられ、あげくのは果てにはフェストゥムに乗っ取られてしまったため、ギャラルホルンによってフェストゥムごと日本は消滅させられてしまった。
これにより、他の星に移動したりするなどで地球を狙うヴェイガンは激減した。
ヴェイガンも戦力の都合上、フェストゥムとは極力戦わない方針を示していた。
生き残った日本人はいくつかの人工島を作り、海へと散った日本人はそれぞれフェストゥム対策のために遺伝子改造やＥＸＡ－ＤＢの一部データを使い出した。ある島を除いて…
その島の名前は大島、フェストゥムを倒す兵器ではなく、ある実験をしていた。

新たな資源エネルギーを作るきかい”示現エンジン”。
これにより、エネルギー問題を解決しようとするが今から7年前事故によって多数の行方不明者と怪我人を出した。
この実験には数十年前から参加しているものもいた。
計画の主なメンバーは一色健次郎、一色ましろ、ミツヒロ・バートランド、B・D・、近藤竜司、ムクレド・マッドーナ。
この中で、警備の近藤竜司と整備のムクレド・マッドーナは行方不明になり、一色ましろはミツヒロ・バートランドに盾にされ今でも入院するほどの後遺症が残った。
それでも、一色健次郎は示現エンジンを完成させた。
一色健次郎はこのエネルギー供給を火星と地球両方が協力してすることによって戦争を終わらせようとした。
しかし、ギャラルホルンは一色ましろの夫大吾を誘拐し、取引をし、結果的には地球圏のみ示現エンジンは使われていった。
この時誘拐された一色ましろの夫は人体実験により体中が毒に侵されてしまい、精神が崩壊していた。
だがこれによりフェストゥム対策用兵器ファフナー第二世代型モデルティターンモデルが完成したため、人類側にメリットがなかったわけではない。

最も一色大吾はその後、同じ病室で幼児退行精神錯乱を起こし、ましろは自分の子どもあかね、もとを祖父に預け、病院で夫の姿を見せられる苦しみを味わい続けた。
医者にも見放されていた、というよりギャラルホルンの権力の見せしめとしていた。
その後、ギャラルホルンに連れて行かれてしまった大吾をましろは助けようとしたところ、両足を銃で撃たれて両足が動かなくなってしまった。
示現エンジンはギャラルホルンによって使われ、一応地球圏のエネルギー問題は解決した。
しかし、今度は謎の黒い影をした敵アローンが現れてしまった。
ギャラルホルンはアローン対策を一色健次郎に押し付け、ヴェイガンとの戦闘の再開準備を進めていった。
ファフナーを使うことを一色健次郎は大吾のことと同化現象のことを考えてモビルスーツを使おうとしたが、ギャラルホルンのものを使うのは反対していたので、自ら新たな力を作り出すべく研究している。
こんな経緯があったからこそ俺たちは危ないながらも安全ではあった。
しかし、今のこの状況は良くはない。
なんせザール星間帝国を相手にしているだけにも関わらず、俺たちはベーダー一族やバラノイアなども敵に回している。

この状況下では、この世界にて少しでも戦力は確保しておきたい。
そのためにもここにある恐竜カードを見つけなければなるまい。
たとえどんなに大変だとして…
どれみ『ねぇーあったよー!』
レスター『ああ、そうか。……!!って何ーー!』
王ドラ『まあ、魔女ですからね。レスターさんもそんなに驚くことではないですよ。』
ライド『思った通り楽勝だったすね。』
レスター『あ、ああ…』
簡単すぎるが…まあ、よかった。
しかし何故だ。
何故こうもあっさりと終わったんだ。
アパテーの破片も見つからない。
そんなはずはない…奴はどこかに…
??『探し物はこいつか?』
突如として現れた男により俺は背後を取られた。
油断していた。
チャド『なんだあんた!!』

???『おおーっ！今回は多いりー！』
そしてその男の側には小さな女の子もいた。
セブン21（今回…いや、考えても意味はない。ともかく俺はこの男に何か不思議な感じを抱いている…）
??『ほう、レスター・クールダラスか。初めて会うな…まあ、タクト・マイヤーズとも会うかもしれんがな。』
レスター『!!なぜ俺の名を…それにタクトの本名まで…貴様ザールか！』
??『ふざけるな！俺はそんなふざけた連中ではない。この世界の人間でもないがな…』
ララ『じゃああなた達はレスターさんのとこの世界の人…』
??『そうじゃない。ウルトラマン、ウルトラセブン、ウルトラマンジャックがいた世界の人間だ。』
セブン21『なっ！じゃあパドックの世界の人間か！ってえことは三大陣営の軍人…いや、コロニーやプラントの軍人か！』
??『違う！あんな愚かな奴等と一緒にするな！俺の名前は藤宮…藤宮博也…そしてこいつが娘の恵理子…元プラントのアルケミースターズのコーディネーターだ。』
ライド『こ、こーでぃねーたー？なんすかそれは？』

ドラえもん『遺伝子改造によって作られた人間で天才って言われる人間のことらしい。そのコーディネーターの集まりがアルケミースターズ…』
のび太『てことは！テストで１００点取ったり運動があんなに出来る出木杉みたいなのがいっぱいいるのー？いいなー！』
藤宮『ふっ…まあ、イメージとしてはそんな感じだがな…だが…お前のような人間が集まり俺たちのことを妬んだ奴等は血のバレンタインを行った!!』
のび太『血のバレンタイン…』
ドラえもん『ユニウスセブンというコロニーに核を落とし、大量殺戮が起こった事件だよ…タイムパトロールでも問題になったんだ。２２世紀の科学者が関係したからなんだけど…』
チャド『なっ！大量殺戮…天才を妬むためだけでか…』
藤宮『その通りだ。天才を妬む人間の集団…ブルーコスモスの手によって何の罪もないコーディネーターが大量に殺された。その後に戦争が起こった。俺は人間に絶望したよ。』
のび太『な、そ、そんな！他の世界の人間は戦争をやりたいの！』
藤宮『その通りだ。お前のいるこの世界では大神一郎のおかげで人類同士で戦争を起こしていないからわからないが人間の本質はそうだ。』

のび太『そ、そんな…』
藤宮『何度も戦火で地上を焼く俺の世界の地球、ザールに媚びへつらい火星と地球の人間が争うお前たちの世界の地球…そして…ダンガンロンパ５３にて殺し合いを楽しむ世界の地球の人間ども…みな愚かだ。そんな地球から俺は人間を滅ぼす。そのためにもこれはもらっておく。』
藤宮は恐竜カードを懐から取り出してこちらに見せつけた。
藤宮『この力を使ってこの地球を守る…だが、バラノイア、ベーダー一族、フェストゥム、アローン、シャドウを殲滅し、地球三大陣営、コロニー、プラント、ヴェイガン、ギャラルホルンの人間どもを全て殺す。』
藤宮は右腕につけていたブレスレットを輝かせて青き光に包まれた!!
そして光が消えた時に立っていたのはウルトラマン！青いウルトラマンが立っていた!!
レスター『な、ウルトラマン!!ウルトラマンだというのか！』
エリコ『そうだりーパパはウルトラマンアグルー！地球がパパをウルトラマンにしたんだりー！』
アグル『そうだ。だからお前たち他の星のウルトラマンのように時間制限もない。』
セブン２１『なっ！だが、実力はどうだか！おおおお！』

セブン２１は巨大化して、ウルトラマンアグルに殴りかかる。
アグル『アアアッ！』
それをひらりと避け殴りかかってきた右腕を取る。
セブン２１『ぐわっ！まだまだ！ヴェルザード!!』
残っていた左腕で頭のヴェルザードという刃を取りアグルの腹部を狙うが右腕を回され飛ばされてしまう。完全にアグルのペースだ。
その後もヴェルザードを投げては手で跳ね返され、光線技も似たような技で相殺されあっという間に２分を過ぎてしまった。
セブン２１『はあっ…はあっ…』
すでに先ほどの光線合戦により、セブン２１は疲れていた。
それに加えてアグルよりもはるかにたくさん動いていたのでカラータイマーが鳴っていた。
レスター『セブン２１が押されている！戦闘経験もたくさんあり、ウルトラ戦士のエリート部隊勇士司令部の２１が…あのアグルというウルトラマン…戦闘経験も多い…』
ヴァニラ『…時間制限がないと言ったのはうそではありませんね…』
そう、アグルのカラータイマーは鳴ってなく、青のままであった。
アグル『…まあ、こんなところだろう。所詮お前たちでは勝てない。かつてアパテー

に殺されたお前たちではな。』
どれみ『えっ！私たち死んでないよ！どういうこと…』
アグル『お前たちは一度死んでるんだよ。こいつのおかげでな。』
そういってアグルは恵理子にてを仰いだ。
すると恵理子はカバンから銀色のものを取り出した。
エリコ『これがアパテーだったものだりーそーれー！』
ヴァニラ『…あれはアパテーの残骸…で間違いありません…』
そういってアグルの頭の上に投げてアグルはその銀色のものを握りつぶした。
アグル『貴様達には強い敵だったが俺にしてみればこの程度問題ない。まあ、今回はこのくらいにしておいてやる。行くぞ恵理子。』
エリコ『わかったりー！』
そういってエリコはアグルの手のひらに乗せてもらい、アグルとともに空へと飛んでいった。
レスター『これが力の差か…』
セブン21『あっ、ああっ…はぁ…』
セブン21は体を縮めて小さくなり、人間の姿となった。
その姿は中年の男性のようであった。

どれみ『あれっ?なんでセブン21はそんな人間の体に?』
セブン21『アグルのいうとおり…ウルトラマンの体で地球に長くいられない。とりあえず人間をイメージしてこのような姿になったんだ。』
どれみ『へぇ〜』
のび太『にしてもさっきのウルトラマンが言ってた僕たちは一度死んでるって…』
ライド『あんなの嘘だよ…なあ?』
マジョリカ『いいや…お主達はちゃんと死んでおるわい…一度いや…場合によっては何度も死んでおるわい。』

モナカス攻略作戦

ー９９年世界ー
ーＵＡＯＨ基地ー
ー司令室ー
三浦『君達は…別世界から来たというのだね…』
私の名前は三浦、この基地で参謀長の役職について地球を守っている。
超力戦隊オーレンジャーの指揮官としてバラノイアの対策をしていた。
そんなある時、バラノイアの戦線布告をした日付とは数日前に襲ってきた。
しかも、バラノイアだけではなく五次元帝国、ベーダー一族もいっぺんに襲ってきた。
これは不自然な構図だ。
今までスーパー戦隊が戦ってきた敵勢力は地球人が喜ばないように同士討ちを避け、共闘はしないという姿勢だった。
しかし、一転して協力している。これは一体…
それに伴い別世界から来た機動戦艦の艦長と宇宙を支配しているザール星間帝国対

立部隊の指揮官た面会している。
ユリカ『はい、木星トカゲを追っていたらいつの間にかここに。』
三浦『それが君たちの言うなのだね…にしてもこんなにも人類の敵が現れるとはね…』
パドック『そうだな…確かに不自然すぎる。あんたの世界は大量に侵略者が現れているからなあ、不思議で仕方ないな。』
ユリカ『でも、こっちでは特に地球内でも結構もめていまして…』
パドック『あーあ、俺のいた世界もだめっぽいぞ。ギャラルホルンとヴェイガンの戦闘は激化する一方だ。それにザール星間帝国の奴等もやばい…』
三浦『私がいた世界は一番平和だったのか…大神総司令に感謝する限りだな。』
ユリカ『それってやっぱり大神一郎さんなんですね！』
三浦『えっ、ええ。しかし、なぜそこまで大神総司令に興味を？』
ユリカ『私のとこにいる巴里華撃団のエリカ・フォンティーヌさんがよく話してくれました。あの人は大事な人だと。』
三浦『並行世界の別人物ですよ。それでも会いたいのでしょうか？』
ユリカ『理屈はともかく会いたいことは会いたいんです！会うだけなら何も問題ありません！』

三浦『まあ、いいと思います。ところであなたたちの他のメンバーはどうなさいましたか？』

パドック『奴等は自分の仲間が奴隷にされているから助けに向かった。部隊の半分は向こうで攻めているはずだ。』

三浦『…我々もそういうことなら力を貸します。オーレンジャーを連れて行ってください。』

ユリカ『はい、ありがとうございます！これでこちらの世界とのしがらみは無くなりましたね！』

パドック『この世界だけでもなんとかしないといけないな…こりゃあ…』

三浦『人間同士の争い…ないだけでも相当すごいことなのか…』

ーモナカスー

一方、モナカスではタクト・マイヤーズが堂々と宣言して攻撃していた。

タクト『こちらエンジェル隊および鉄華団！今からモナカスを攻めまーーす！全艦攻撃目標モナカス全域!!防衛システムを破壊開始！』

オルガ『お前ら!!全力でやりやがれ！』

アキヒロ『やってやるか！』

グレート『奴隷制度を見過ごすわけにはいかない。』

ジョウ『おう！みんな行くぜ!!』
レニー『ようし！やってやるんだから！』
マイク『おいおい！置いてかないでくれよー！』
自動防衛システムを相手に味方は破壊し、無人のロボット軍団に全く怯んでいなかった。
というか、ほぼ圧倒していた。
所詮は付け焼き刃程度の防衛戦力。
さすがに苦戦してなかった。
問題はエネルギーのロスくらいかな。
ユージン『ここらの敵に問題はない。ザ・ブームのロボットかトランスフォーマーだ！エースはいないから気を配る必要はなけどよ…』
タクト『例の二人が来ることも覚悟しておかないとね…ところで突入部隊はどうなっているんだい？』
チャド『奴隷マーケットの販売所までたどり着きました。』
オルガ『よし！片っ端から救助して船に詰めていけ！派手に奴隷制度を壊すほうがザールへの一手になるはずだ！』
タクト『注意すべきはタケダ軍のリーダー、シンゲン・タケダ、シド、レイ、ハカイ

ダーだ！もし、現れたら最大限の注意を払うんだ！』
ユージン『え？タケダ軍がこの場所に来るのか？』
タクト『確かに来ないと思うほうが自然だが、俺は来ると思うぞ。奴等にとっては俺たちにプライドをズタズタにされた相手だからな。ザールがどうとかは関係ないはずだ。』
オルガ『舐められっぱなしのままで終わる奴なんて存在しないってことだ。』
ユージン『そうか。最悪のケースも想定してろってことだな…京極圭吾はどうだ？』
オルガ『この星の門番か…来たいがこれないと考えても良いな。』
ユージン『どれみの世界でコテンパンにされたと聞いている。しかし…ライジンオーもないとなると…それに京極圭吾がどうして蘇えったのか…』
タクト『今はともかく、突入部隊の小樽、ライム、ミント、フォルテ、ダミアンの帰りを待つだけだ。』
ユージン『エルシオールがないにしても、紋章機を整備することは出来るようになるんだろ。』
オルガ『ところで、俺たち鉄華団、あんた達エンジェル隊、ほかのメンバー、いい加減この集まりに名前をつけねえのか？』
タクト『そうだねー、まぁ…ねぇ…うーんと、モナカスと何かを組み合わせてみるつ

もりだけど…ともかく！防衛システムを破壊しまくれ!!』

ーモナカスー

??闘技場ー

『さあてと…向こうも動き出したか、ここらで頑張ってくれよな、赤松楓。』

赤松『はい。』

????『…こりゃ裏があるな。』

バッドエンドだとしても…

ーモナカスー
ー闘技場牢屋ー
ダミアン『そこの道を右か左どちらに行けばいいんだ？』
ミント『そこですわ！そこに行けば人がいますわ！』
俺の名前はダミアン。
いわゆる火星に住んでる奴、ヴェイガンの未来の兵士候補なんて呼ばれている。
だが、俺はつい昨日、ここに来た。
このエルシャンクに少し前に入った。
ジョウから誘われてここに来た。
上手く侵入したがすぐに見つかった。
まあ、何の問題もなかった。
すごく不気味であったが、ジョウからの斡旋があったとはいえあのタクトさんはおかしいだろ。

タクト『俺ね、多分おかしいんだと思う。この時代にザール星間帝国に喧嘩を売るなんて以ての外だと思う。だけどやらなきゃ…誰かがやるを…俺がやる。』
タクト『だからね！来るもの拒まず!!裏切られた仕方ない。それだけだ！』
といってくれたので、当面の飯に困ってたのも助かった。
まあ、ともかく俺はその恩のためにも奴隷になっているエルシオールメンバーを探していたのだった。
ダミアン『とりあえず、助けないとな。』
フォルテ『今の騒動で敵はいないよ!!さあ、助けてあげ…』
俺は先行するフォルテさんに追いつき、牢屋を見る。
するとそこには予想通りというか、やはり廃れた月の巫女達の残酷な姿があった。
目がない、鼻がないは当たり前。
だるまに皮膚剥ぎ、大火傷などもあった。
流石というか気味が悪い。
そして何より虫酸が走ったのは…
月の巫女『助け…助け…タスケ…痛い…痛い…イタイ…イタイ…』
目から虫が出たり入ったりし、空いた体中の穴からも寄生虫が出てくる。
しかもこれは生きている。

いや、生かされている。
面白半分でこんなことをしてやがるおぞましい連中だ。
ミント『自我は保っていますが…いや…保っているほうがおかしいですわ…』
フォルテ『こいつがザールのやり方さ、死や精神崩壊なんて優しいやり方は絶対にやらない。精神はそのまま、全力で快楽のまま人を傷つける。』
ライム『なんとかならないの。』
小樽『畜生!!こんな奴等が宇宙を支配してるなんてな!』
ダミアン『やっぱりな…これがザールのやり方か反吐が出るな。』
フォルテ『これが奴等に逆らえない理由の一つだったんだ。しかもこいつらのやり方はただその本人に向けられるものじゃない。親族友人全てをこうするのさ!』
ダミアン『な、家族やダチにもそんな風にするのかよ!』
フォルテ『そうさ!実際に私の星では家族がいる奴のほうが珍しかったくらいさ。』
ダミアン『まだ家族がいる俺たちは幸せだったってことか…』
ミント『ま、そうとも言えませんがね…こんな願いは贅沢ですね。』
小樽『おいらたちにはそういうのはいねえからわかんねぇけどよぉ…いいもんだって聞いてはいるぜ。』
ミント『テラツーのシステム上、それは仕方ないのかもしれません。だからこそ、マ

リオネットが誕生したのですわ。』
ライム『ふーん、よくわかんない！でも、小樽といたい！』
フォルテ（ま、そういう目的で作られている以上こんな性格にプログラムされているのかねぇ…でも、こんな笑顔を見せないはずだが…）
ダミアン『でも、とりあえずここから逃げて行くんだろ、そろそろ連れて行こうぜ。』
ミント『予定ですとそろそろジョウさんが来てくれるはずですが…』
小樽『そうか、あの黄色いのか！へへ、まあともかく作戦は成功だな！』
フォルテ『そうだといいんだけどね…私にはあえてここに連れてきたと思うんだ。』
??・??『その通り…』
フォルテ『！』
フォルテがすぐに銃を構えて声がした方に発砲する。
ダンダンダン！
フォルテ『な！バラノイアのバーロ兵の装甲すらも貫通するこの銃の弾を弾いた…』
??・??『そんな奴等と比較するとはね…私たちを大分馬鹿にしているのね…』
ミント『バラノイアを馬鹿にしている？ということは…トランスフォーマー？』
??・??『違う…私たちはジャジメントの緑炎、黄炎！』
ダミアン『なんだそのジャジメントってのは？俺はしらねぇぞ。』

緑炎『ああそっか。あんたらはまだ会っていないのか…いや…まあいい。ともかくあなた達にはこれからこのモナカスを脱出してもらいたい。』
小樽『な！おめぇらここの防衛部隊じゃねぇのか！』
黄炎『違いますよ。私たちはジャジメント…ザールに反抗する組織ですよ。そして、私たちは前々から侵入していて、あなた達に協力するために待っていたんです。』
ミント（…心が読めない…人間ではないんですか…）
緑炎『ともかくここから逃げるためにも早く出た方が良いですよ。』
不安が募る。
拭いがたい不安と恐怖が体を通る。
わかる、こいつらは強い。
どういう理屈だかはわからないが奴等は何か違う。
バーロ兵でもザール兵でもない強さがある。
ともかく従うのが懸命だ。
ほかの皆も察していた…こいつらの強さや雰囲気は敵に回すべきではないと…
まあ、ライムは違うみたいだけど…
フォルテ『わかった。しかしこっちにも余裕があるわけじゃない。一定の作戦は立ててあるからね、それ通りに動く必要がある。』

緑炎『私達が望むのはここから奴隷が脱出することだけだ。その他のことに口を出すつもりはない。手を出すこともモナカスの防衛隊は私のほうが知っている。もうすぐ終わりだ。』

小樽『よっしゃあ！作戦成功でえい！』

黄炎『ただし…モナカスの防衛隊はな…』

ガァン!!!

ジョウ『よう、遅くなったぜ！』

ジョウが黒獅子に乗ってここにきた。

どうやらひと段落ついたらしい。

ダミアン『遅いぜジョウ！』

ジョウ『うるせぇやい！ともかくそこのブロックごとここから逃げるぞ。』

フォルテ『タクトの指示か…まぁ、それが懸命だね。でも、空気はどうするんだい？』

ジョウ『ここにバリアを張るから大丈夫だそうだ。ま、それでなんとかなるだろって…それにもうすぐここにパドックたちがやってくる。そいつらに追っ手を任せる。ってらしいぜ…』

ミント『ともかく慎重に切り離してくださいね。』

ジョウはブロックを丁寧に切り離して持っていった。

そのころ…竜宮島では…

??『くっ…こないな…こないなことになるなんて…』

??『思っていなかったか？残念だったなぁ…今回も俺の勝ちだ。惜しかったなあ!!ま??????今回はお前にとってはよくやったほうだよダークスピア…いや…茨木和那ちゃん。』

??和那『黙らんかい!!なんで…なんでうちがお前みたいな奴に…』

??『カタストロフを妨害し、ジャジメントがなくなったからみんなハッピーエンド!!なんて考えてる脳味噌お花畑の和那ちゃんに俺が負けるわけがないだろ。』

??和那『難波重工…完全にあんたはノーマークやったわ…でもなんでうちがこうも…』

??????『そりゃあお前をイメージしたあいつがここにいないからさ。』

??和那『な、なんやて!!じゃあ…』

??????『その通りだよ、あいつはもう死んだ。そして天月五十鈴…天月沙矢香…天月斗真もな…苗字まで変えて逃げてご苦労なこった、ま、お前にとっては残念だったわけでないよな、喜べよ。また、一緒にいられるんだぜ？親切高校の友達があの世でな。』

??和那『……くそっ！くそっ！くそっ!!おおおお！』

??????『もう、そろそろ消えろよ鬱陶しい。お前にはもう未来はない。考えてもみろ…お前が愛した浅羽斗真はお前ではなく天月五十鈴を選び幸せに暮らした。だが、その時お前はどうしていた！女としての喜びを捨て！いつ終わるかわからない戦いに身を投じ

て挙句の果てに死に！人間でなくなり、好きな男の子も産めない！歳もとれない！惨めな人生だったって！笑ってやるよ！はーっはっはっはっ！』

和那『頼む…次こそはあんたを…ブラッドスターク…を倒して…』

シュウン…

ブラッドスターク『その言葉は何回も聞いたよ。だが、今回は本当に楽しめたよ。ま、あの少年”森寿四野”は生きてるがな…さあーてと、これで残るは後三人、黒衣の復讐者と赤色の格闘者と桃色の狙撃手…こいつらを潰せば地球は滅ぶ！はーっはっはっはっ！』

ザッザッ！

『あなたは結局、バッドエンドでもいいといいました…でも、私にしてみればハッピーエンドも見てみたかったですよ。』

『こいつは救われたぞ…背負うものを全て捨てて死んだ…天国があるなら…あいつはそこで全力で初恋の男とともにいるじゃろ…それこそがハッピーエンドじゃろ。』

『…そうかもしれないですね…あなたはこれからどうするんですか、崩壊するこの世界から逃げますか？』

『わしらは運がなかった…ただそれだけじゃよ。それに次こそやってくれるじゃろ…なぁ…どれみ…あいこ…はづき…おんぷ…今回こそはお前たちに会いたかったのお…』

『…まだ私は何かしてみますよ…ブラッドスタークのことを…あなたはどうするんです。マジョリカさん。』

マジョリカ『……次に託すためにもわしがやることをやっておくだけじゃわい。ホンフー、お前とおんなじじゃ。』

ホンフー『そうですか、お互いに頑張りましょう。次の始まりの男のために…』